

〔原 著〕

## 遊び場面における障害児ときょうだいの相互作用と役割取得

泊 祐子<sup>1)</sup> 古株ひろみ<sup>2)</sup> 田中 清美<sup>3)</sup> 竹村 淳子<sup>4)</sup>

## 要 旨

本研究はミードのシンボリック相互作用論による役割理論を枠組みとした。障害児をもつきょうだいがどのような相互作用をしているのか、その相互作用からきょうだいはお互いにどのような役割取得をしているのかを明らかにすることを目的とした。

対象は、3才10か月から8才8か月の障害児とそのきょうだいの13組（以下障害児群という）と性や年齢を合せた対照（以下健常児群という）の13組の計26組である。方法は、きょうだい間で、日常、よく見られる遊び場面での二人が関わっている様子を撮影し、撮影テープの分析を行い障害児群と健常児群を比較した。分析方法は、遊び場面の10分間のビデオテープを10秒間毎に60のインターバルに分け、インターバル毎の行動の意味を分類した。分類項目は、起因行動としては、提示・演示・援助等の好意的行動、要求・支配・攻撃等の支配的行動と無意図行動の3項目である。呼応行動は肯定的反応と否定的反応の2つの項目からなる。分類した2人の起因行動と呼応行動を組み合わせると、12の行動パターンであった。さらに、これに共同作業、大人との関わり、単独行動を加えて、15の行動パターンとなった。

その結果、障害児群では大人との関わりが健常児群よりも有意に多かった。健常児群は障害児群よりも有意に共同作業が多かった。障害児群では障害児の好意的行動にきょうだいが否定的に反応することが多かったが、健常児群ではきょうだいの好意的行動にそのきょうだいが否定的反応をすることは少なかった。障害児群で支配的行動をとる障害児に対して、そのきょうだいが肯定的な呼応をすることが、健常児群で支配的行動を取る一方のきょうだいに対してもう一方のきょうだいが肯定的な呼応をすることに比べて有意に少なかった。

障害児のいるきょうだいでは、きょうだいが障害児のサインを読みとれないか、あるいは自分のしたいことに集中し無視する結果になったと考えられるので、きょうだいが楽しく関わりをもてるために、大人がある程度、解釈的な手助けをする必要があることが示唆された。

キーワード：障害児、きょうだい、相互作用、観察、役割取得

## 1. はじめに

障害児のいるきょうだい関係をみると、P. Vadasyら<sup>1)</sup>の障害児家族の相互作用のレビューでは、きょうだい関係の研究データのリソースが主に教師や親あ

るいは成長したきょうだいによる想記法であることを述べ、きょうだいからの直接的なデータの収集の必要性を指摘した。データリソースを子どもの行動観察で行っているBrodyら<sup>2)</sup>の研究は、発達遅滞児と年上のきょうだいの相互作用を家庭での遊び場面の行動観察を通して、役割行動について分析した。その結果、発達遅滞児をもつ年上のきょうだいは健常児群よりも有意に教師役、ヘルパー役を多く振る舞った。また、発達遅滞児をもつ弟妹は、発達遅滞児のい

<sup>1)</sup> 滋賀医科大学 看護学科

<sup>2)</sup> 滋賀県立大学看護短期大学部

<sup>3)</sup> 広島県立保健福祉大学

<sup>4)</sup> 滋賀県済生会看護専門学校

ない弟妹よりもより支配的な役割を引き受けた。これらの結果から発達遅滞児のいる弟妹には、発達遅滞児のいない弟妹よりも役割不均衡が起こっていると指摘した。

子どもの入院や発病によって、同胞のうける影響についてみると、Gath, A<sup>3)</sup>はダウン症児の男児きょうだいと女児きょうだいを親と学校の教員による行動評定尺度を用いて評定し、比較した。男児きょうだいに標準から逸脱する結果を示す者が多く、女児の中にはダウン症児よりも3歳以上年上の姉に反社会的行動が多くみられると報告した。日本においても同じような報告が事例研究の形式でいくつかみられた<sup>4)5)</sup>。姉は障害児の世話など母親の家事の分担者としての役割を担わされ、その責任の重さが反映し反社会的行動や心身症として現れたと考えられる<sup>6)</sup>。しかし、必ずしも否定的な報告ばかりでなく、親が障害児の存在を積極的に受けとめている場合、健常なきょうだいも障害児の存在を肯定的に受けとめるという報告が米国ではある<sup>7)8)</sup>。障害児のいるきょうだい関係の研究は、まだ一定の見解には至らず、研究の途に着いたばかりのように思われる。

そこで、障害児をもつ家族への育児支援を考える上で、きょうだいの相互作用に着目しきょうだい関係を検討する意義は大きいと思われる。

## II. 研究目的

障害児をもつきょうだいの相互作用の特徴を明らかにする。またその相互作用によつてきょうだいはどのように役割取得を行っているのかを考察する。

## III. 概念枠組み

きょうだいの言動と行動からなる相互作用の意味を明確にするために、ジョージ・ハーバード・ミードのシンボリック相互作用論による役割理論を枠組みとした<sup>9)10)11)</sup>。ミードは人間の自我は他者の「役割取得」を通じて社会的に形成されると考えた。自我は

他者の態度や期待、パースペクティブを自らのうちに取り入れることを通じて形成される。シンボリック相互作用論は、人間の社会的相互作用を、言葉を中心とするシンボルを通じての行為のやりとりとして考えている。

人間は、他者の言葉や行動を解釈し、「意味のあるシンボル」として捉える。「意味のあるシンボル」はそれ自体、受け手によって選択され、修正、変更し再構成される。そこに人間の自発性、主体性が生まれる。「役割取得」は、人間が他者と意味の共有をすることを表す。その意味のあるシンボルの共有によつて自己と他者の間に「社会性」「関係性」が生み出され、役割が取得される(図1)。

本研究の概念枠組みは、「きょうだい間の言葉や行動のやりとりにより『意味のあるシンボル』が交換されることにより、きょうだいからの役割期待を自我の中に取り入れて、役割が取得される。取得された役割は、すぐに行動として外に表現されるのではなく、自我の中で相互作用する」としたものである。

本研究では、きょうだいのあるがままのやりとりを直接観察によるデータ収集からきょうだいの相互作用を行動と言語のやりとりの行動分析から捉える。

## IV. 研究対象と方法

障害児とそのきょうだいの遊び場面でのやりとりを観察し、きょうだい間の相互作用を分析した。分析は、ノンパラメトリック検定によるマンホイットニーのU検定を用いた。

### 1. 対象

障害児群は2年以上通院し、訓練を受けている3才10か月から8才8か月までの障害児と健常きょうだいをもつ家族13組を対象とした(表1)。

健常児は障害児ペアと性と年齢を合わせて、年齢幅の誤差は10カ月以内とした。

対照群となる健常児たちは、障害児家族が居住する地域の幼稚園に依頼し募集するとともに、知人の

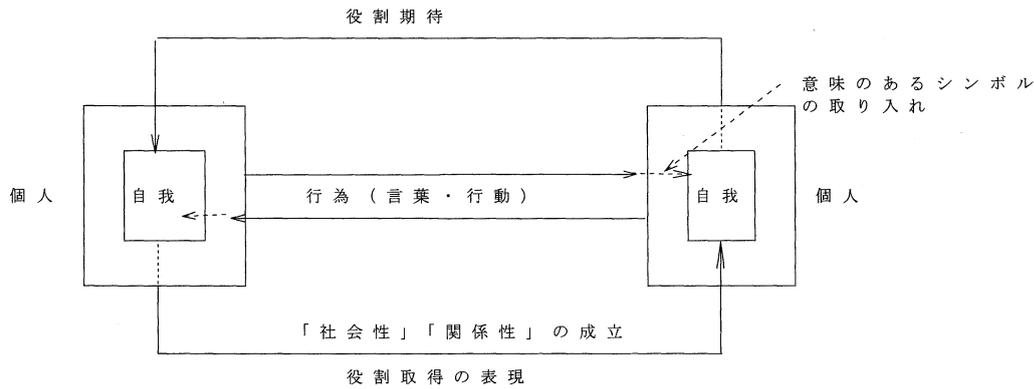


図1. 概念枠組み

表1. 対象の障害の種類と発達状況

事例番号	障害の種類	発達の状況	きょうだい順位と性	
			障害児	健常児
1	言語発達遅滞	発語あるが、人との関係づくりが できにくい 集中力やや欠如	兄	妹
3	左孔脳症による片麻痺 てんかん	右手が不自由 日常生活に支障なし	妹	兄
5	ダウン症候群	言葉が不明瞭	妹	姉
7	染色体異常 點頭てんかん	短距離の独歩可能 コミュニケーション可能 遊びは模倣中心	妹	姉
9	重度の脳性麻痺	四肢麻痺が強く、全介助、相互理 解困難	弟	姉
11	重度のダウン症候群	コミュニケーションとりにくい 集中力がやや欠如	兄	妹
13	重度のダウン症候群	コミュニケーションとりにくい 関係がとりにくい	兄	弟
15	脳出血後の片マヒ 脳性マヒ てんかん	コミュニケーションとれるが、構音 障害ある 片側不自由	姉	弟
17	ダウン症候群	コミュニケーションとれるが、言語 不明瞭	妹	兄
19	重度の脳性麻痺	コミュニケーションとりにくい 多動、関係がとりにくい	兄	弟
21	重度の脳性麻痺	四肢麻痺が強く、全介助、意思表 示可能 コミュニケーション良好	弟	兄
23	アテトーゼ型脳性マヒ 手指作業能力劣る	構音障害あるがコミュニケーション 可能 下肢装具にて歩行	兄	弟
25	発達遅滞 肢体不自由	下腿装具にてウォーカーにて歩行	妹	姉

紹介も加えた。

## 2. 観察場面の設定

観察室は、窓の大きな明るい部屋（約60m<sup>2</sup>）で、室内に6×3mのマットを敷き遊び場所の空間設定をした。マットの横におもちゃを用意した。おもちゃの種類は、木製の連結貨車・客車・機関車セット二種類三組とミニカー・チョロQ、ミニ人形を用意した。

## 3. 観察手続き

調査協力の確認後、子どもたちには10分間程度テレビを視聴してもらった。場になれた頃に、子どもたちはマット上でおもちゃを使って自由に遊ぶように、説明をした。おもちゃ遊びを10分間した後、おやつを二人で食べてもらった。

二人で遊ぶおもちゃの選択から始まりおやつが終了するまでの間をビデオに撮影した。

表2. 分類項目

起因行動	呼応行動	その他
①: 好意的行動 (提示・演示・承認・ 注目・援助・見守る)	④: 肯定反応 (受容・従属的反応)	大人との関わり 単独行動 共同作業
②: 支配的行動 (要求・支配・攻撃)	⑤: 否定反応 (拒否的反応・無反 応・無視)	
③: 無意図行動		

#### 4. 分析方法

撮影したビデオは25分30秒から32分であった。そのうち遊び場面の初めの10分間をZ. Stonemanら<sup>12)</sup>の分析方法と同じく10秒ごとのインターバルに分け、インターバル毎の相互作用を意味づけし分類した。

#### 5. カテゴリーの作成

大分類は、働きかける行動(起因行動)とその呼応行動、その他の3つである。BrodyやStonemanらは家庭での自然な観察を通して、きょうだい関係の役割(教える役割、教えられる役割、管理的役割、援助する役割、遊び相手、相互交流者)と行動(積極的行動、否定的行動)とその他(単独行動、呼応行動)に相互作用を分類した。しかし、われわれのパイロットテストでみると本研究の対象者からは、はつきりとした「教える」「教えられる」「管理する」という行動が明確には分けられなかった。そこで、大きく先に行動を起こした起因行動とそれを受けた呼応行動に大きく分類した。「教えられる」という受け身の行動は、呼応行動として受容的に受けた肯定的行動と、相手からの行為を拒否した否定的行動の2つに分類した。Z. Stoneman & G.H. Brodyら<sup>13)</sup>と京林<sup>14)15)</sup>の分類を参考に予備テストの後、表2、表3の分類カテゴリーを作成した。

そのカテゴリーは、起因行動(好意的行動、支配的行動、無意図)に、それに呼応する呼応行動(肯定的行動、否定的行動)をどのように示したのか、それらの行動を組み合わせ、1つの相互作用行動とした。起因行動は、BrodyやStonemanらの積極的、否定的行動を参考に、好意的行動(提示・承認・援助・許可・注目)と支配的行動(強要・禁止・邪魔・要求・攻

表3. 行動パターン

障害児の行動	兄弟姉妹の行動
好意的行動	— 肯定反応
好意的行動	— 否定反応
支配的行動	— 肯定反応
支配的行動	— 否定反応
無意図行動	— 肯定反応
無意図行動	— 否定反応
肯定反応	— 好意的行動
否定反応	— 好意的行動
肯定反応	— 支配的行動
否定反応	— 支配的行動
肯定反応	— 無意図行動
否定反応	— 無意図行動
大人との関わり	
単独行動	
共同作業	

撃)、さらに特に相互作用を意図しない行動が相手の呼応行動を引き起こした「無意図」の3つに大分類した。呼応行動は肯定的(受容・従属)と否定的(拒否的・無反応・無視)反応の2つに大分類した。これらの起因行動と呼応行動を組み合わせ、相互作用カテゴリーができた。相互関係のない「単独行動」、どちらが働きかけたか特定できないぐらい対等な行動の「共同作業」、観察場面にいる母親や撮影者への提示・承認、指示・援助の要求を「大人との関わり」として分類した。相互作用カテゴリーの12のパターンに、さらに「大人との関わり」と「単独行動」、「共同作業」を加えて15パターン(表3)の行動パターンとした(表3)。

相互作用カテゴリーの文中での表示は、○○-△△と示し、ハイフンの前に障害児(健常児群の障害児対応の子ども)の行動、後ろにきょうだいの行動を記載する。

#### 6. 倫理的配慮

対象家族への倫理的配慮は、あらかじめ調査協力の承諾を得られた家族に対して、調査前に再度個別に書面で調査目的を説明し、承諾の確認をした。調査の実施に当たっては他の対象家族と出会わないように配慮した。

表4. 行動パターンの出現頻度と割合

行動パターン	全体		障害児群		健常児群		有意差
	行動数	%	行動数	%	行動数	%	
好意—肯定	212	13.59	81	10.38	131	16.79	
好意—否定	100	6.41	76	9.74	24	3.08	*
支配—肯定	77	4.94	24	3.08	53	6.79	*
支配—否定	38	2.44	29	3.72	9	1.15	
無意図—肯定	34	2.18	14	1.79	20	2.56	
無意図—否定	14	0.90	11	1.41	3	0.38	
肯定—好意	280	17.95	136	17.44	144	18.46	
否定—好意	72	4.62	29	3.72	43	5.51	
肯定—支配	46	2.95	24	3.08	22	2.82	
否定—支配	19	1.22	8	1.03	11	1.41	
肯定—無意図	65	4.17	39	5.00	26	3.33	
否定—無意図	4	0.26	1	0.13	3	0.38	
単独行動	382	24.49	181	23.21	201	25.77	
共同作業	97	6.22	27	3.46	70	8.97	*
大人との関わり	120	7.69	100	12.82	20	2.56	*
合計	1,560	100	780	100	780	100	

n=26組 \* = P < .05

## V. 結果

きょうだい同士の遊び場面の10分間を10秒のインターバルに分けると1組で60個の行動数になる。その二人の行動を行動パターンに分類した。

### 1. 行動パターンの出現頻度と割合

行動数は、1組60個の行動で、26組で1560行動となる。26組にみられた1560個の行動パターンへの分布を表4に示した。最も多く出現したパターンは単独行動382(24.49%)で、第2位が「肯定—好意」280(17.95%)、次いで「好意—肯定」が212(13.59%)、これら第3位までの全行動数の5割を越えた。

障害児群と健常児群に分けて見ると、1番目は単独行動、次は「肯定—好意」で全体と同じであるが、第3番目が障害児群では、「大人との関わり」100(12.82%)であった。「大人との関わり」の内容は、遊び場面で親や研究者の大人にどうしたらよいのか指示を求める行動、自分の行動の確認や承認、できないことを依頼する行動であった。

健常児群では、「好意—肯定」131(16.75%)、第4番目が、それぞれ「好意—肯定」81(10.38%)、「共同作業」70(8.95%)となった。

### 2. 行動パターンの障害児群と健常児群の比較

両群を比較するためにそれぞれ行動パターンを図2に示し、両群間で順位和検定を行った。その結果、「好意—否定」、「大人との関わり」、「支配—肯定」と「共同作業」の4つの行動パターンに有意差(p < 0.05)が認められた。

「好意—否定」カテゴリーは、障害児および障害児対応児からの好意的行動に対して、健常きょうだいが否定的に反応する行動を示す。このカテゴリーの出現頻度は、障害児群9.74%、健常児群3.08%と障害児群に有意(P < 0.05)に多く出現した。また、「大人との関わり」は、障害児群が12.84%、健常児群が2.56%と障害児群に有意に多く出現した。

「支配—肯定」カテゴリーは、障害児および障害児対応児からの支配的行動に対して、健常きょうだいが肯定的に反応する行動を示す。このカテゴリーの出現頻度は、障害児群が3.08%、健常児群が6.79%で、健常児群に有意に高く出現した。また、「共同作業」も障害児群3.46%、健常児群8.97%であり、健常児群に有意に多く出現した。

### 3. 出生順位による比較

障害児の出生順位の上下によって、障害児が上の場合の5組、障害児が下の場合が8組であった。行動パターンをマンホイットニーU検定を用いて比較すると、「肯定—好意」行動では、上の場合4.30、下

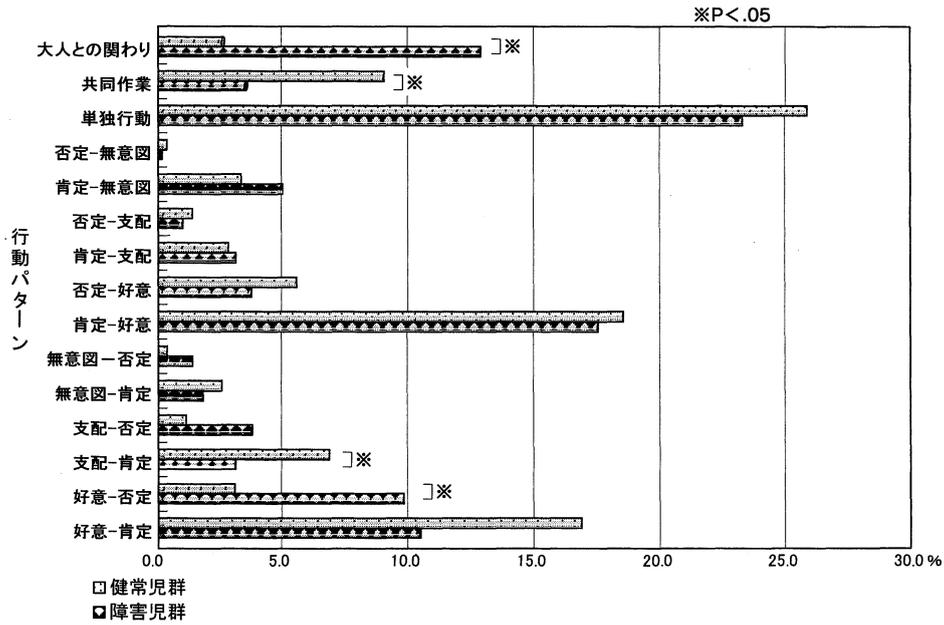


図2. 行動パターンの出現割合の比較

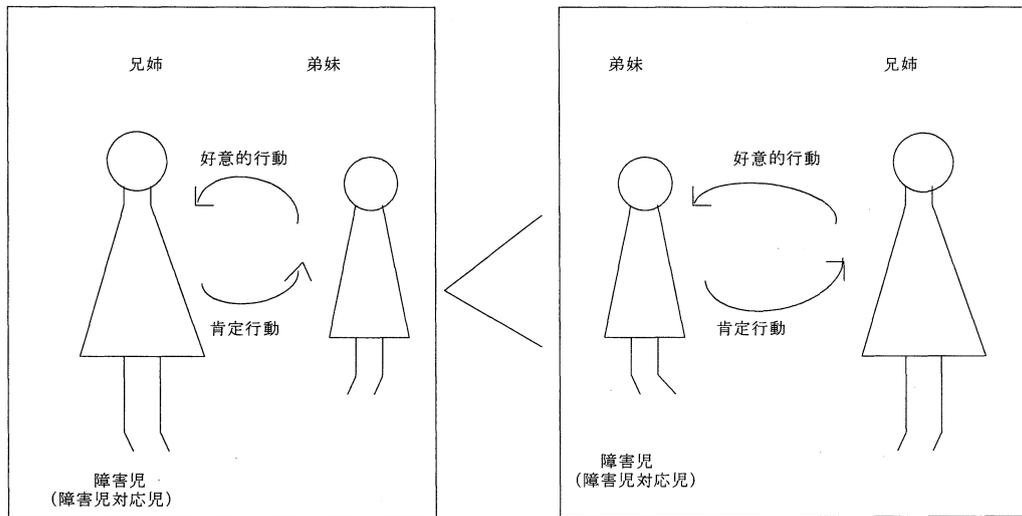


図3. 「肯定-好意」行動の出生順位による相違

の場合は8.69で、5%水準で有意差があった。26組全部において、出生順位でも、「肯定-好意」カテゴリーでは上の場合は、7.5、下の場合17.22では同じ結果であった。模式図を図3に示した。

4. 出現頻度の少ない行動パターン

図2より出現割合の少ない行動パターンをみると、「否定-無意図」4 (0.26%)、「無意図-否定」14 (0.90%)、「否定-支配」19 (1.22%)、「無意図-肯定」34 (2.18%)、「支配-否定」38 (2.44%)であつ

た。

きょうだいの行動のうち該当しなかった行動パターンを多い順にあげると、「否定-無意図」、「無意図-否定」、「支配-否定」、「否定-支配」であつた(図4)。

健常児群ではきょうだいペアすべてが示した行動パターンは、「好意-肯定」「支配-肯定」「肯定-好意」「単独行動」であつた。しかし、障害児群ではそれらの行動パターンに該当しないきょうだいペアがい

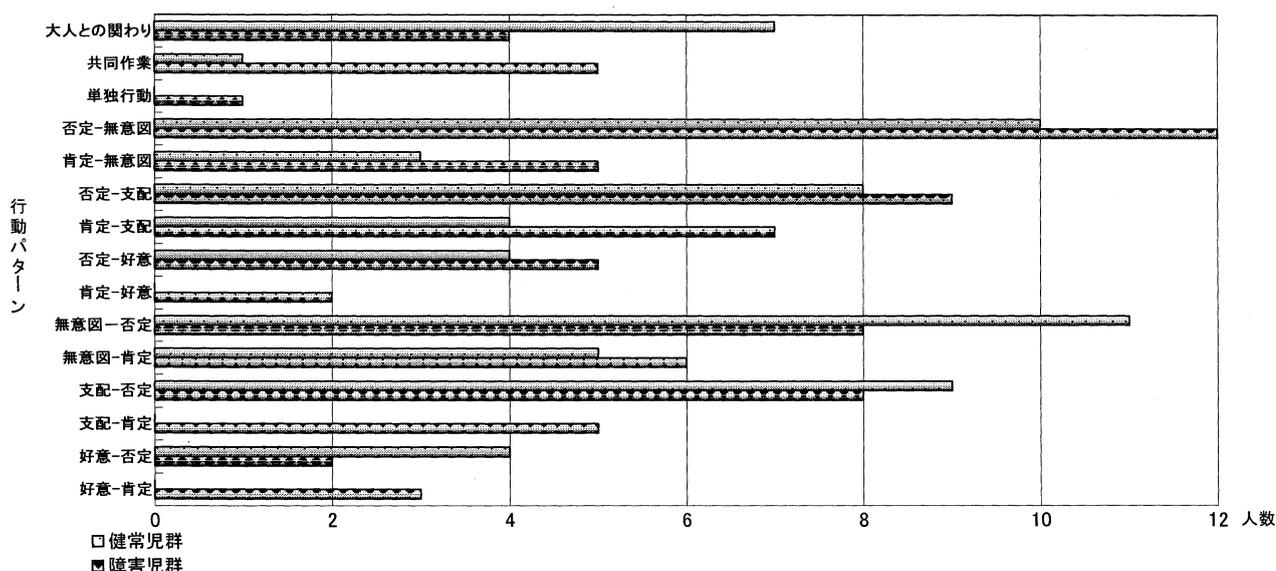


図4. 行動パターンを示さなかつたきょうだいペアの数

た.

5. 起因行動と呼応行動への注目

起因行動と呼応行動に注目し、きょうだいペアのどちらが起こした行動かに拘らず、起因行動の①好意的行動、②支配的行動、③無意図行動と、呼応行動の④肯定的行動、⑤否定的行動の5つに再分類し、障害児群と健常児群で比較した。障害児群では、否定的行動の平均ランクが16.46、健常児群では10.54であった。障害児群に有意に高く、否定的行動が出現していた。出生順位による影響があるのかを見るために、出生順位でも比較したが、有意な差は認められなかった。

VI. 考 察

障害児のいるきょうだい関係の特徴を明らかにするために、健常児きょうだいと比較し検討した。

1. きょうだいの相互作用

「単独行動」の出現割合が全体の約4分の1を占めていたが、相互作用のない行動については、京林らの研究<sup>16)</sup>において、遊び場面での相互作用行動の出現率が全体の約3割と報告していることを考えると決して多い割合ではないと思われる。むしろよく関わ

っていると考えられる。

「好意—肯定」「肯定—好意」の行動パターンはお互いに相手に好きであるとか、プラスの積極性を示す行動であり、両カテゴリーで行動全体の半分を占めていた。きょうだいはお互いにプラスの相互作用をしていると考えられる。

逆に、マイナスの相互作用を示す否定、無意図、支配をとる行動パターンの出現率が少なかったことは、きょうだいの遊び場面のやりとりの中では、無意図、否定的行動や支配的行動は観察されにくいことを示したと言える。人と関係をもつ上で、無意図、否定的行動、支配的行動で人に接するよりも、お互いにプラスの関係を作るような行動をとっていることとみることができる。きょうだいの相互作用は社会的相互作用の始まりである<sup>17)</sup>ので、このようなきょうだいの相互作用の有り様は、障害児のいるきょうだいにおいても遊びを通して、社会性を築く基礎的な対応が好意的な関係から成り立っていると再確認できた。

障害児群において、「大人との関わり」カテゴリーが有意に多かった結果の理由として、一つには、お互いにできないことや分からないことの手助けを大人に求めていると考えられる。何か困った時にきょう

だい同士で考えるというよりも大人に尋ねるといふ行動パターンになっているといえる。日常生活のきょうだい関係においても大人の介入が多いことが推測できる。

もう一つの理由として、障害児と健常きょうだいの関わりに、大人がある程度手助けなどの調整をしないと遊びが楽しく進まないことが考えられた。それは、観察場面で、障害児、健常きょうだいに拘わらず両方が分からないことを大人に尋ねた。また「みて、みて、できたよ」といふような承認を大人に求める行動も両方に多くみられた。大人に認めてもらいたい気持ちが、健常児群に比べて障害児群の方に多く観察されていた。

## 2. 役割取得

健常児群では、共同作業が障害児群より有意に多く認められたことは、どちらが先に行動を起こしたというのではなく、同じ目的に向かってお互いに了解し合っただけの関わりでの現れであるといえる。

対等な関係と思われる健常児群に「支配—肯定」カテゴリーも有意に多くみられた。その理由の一つには、ある目的に向かっての共同作業をする中では、従える程度の命令や要求のような支配的行動が、相互作用の中では必要になると考えられる。そうすることによって、意味の共有ができ、共同作業が順調に進み目的を達すると考えられる。これらの場面を通して、健常児群はお互いに命令や要求といった相手からの役割期待を了解して、その役割を取得していると言える。

きょうだいの上下関係における呼応は、図3に示したように兄弟からの好意的行動を弟妹が肯定的に受けとめることが、弟妹からの好意的行動を兄弟が肯定的に呼応する反応より多かつた。この結果は、弟妹は兄弟に従いやすいことを表しており、お互いの位座を理解し、シンボルの共有ができていると考えられる。他方、障害児群では、「支配—肯定」カテゴリーが有意に少ないという結果は、障害児がきょうだい関係の中で援助を受ける立場であることを無意識に了解していると考えられる。

障害児のいるきょうだいでは、「好意—否定」カテゴリーが健常児群より有意に多く認められたことは、きょうだい障害児のサインを読みとれないか、あるいは自分のしたいことに集中し無視する結果になったと推測できる。それは障害児の出した提示や演示等のサインを読みとるには、きょうだいが「幼い」か、「自分のしたいこと」があり、無反応や無視になったと思われる。すなわち「世話をする」などの援助者役割が遂行できていない<sup>18)</sup>と思われる。

## 3. 障害児のいるきょうだい関係の特徴に対する支援

人間の自我形成のプロセスは、第一段階では、ごっこ遊びの段階において、子どもは父や母、先生などの役割を演じることを通して学ぶ。子どもは成長するにつれて多くの人たち、父母、きょうだい、先生や近所の人などに関わるようになる。複数の人たちが同じ期待や態度を示すことはないので、そのままでは複数の役割葛藤を起こす。しかし、このような葛藤を避けるために子どもは、通常複数の役割、態度や価値観を組織化する。つまり、「一般化された他者」の期待がそのまま役割取得されるわけではない。

子どもは障害があるなしに拘わらず、きょうだいとの関係において積極的なプラスのやりとりを行い、相互作用していた。

障害児のいるきょうだいでは、きょうだい同士でやりとりを理解し合ったり、役割期待を十分読みとれず、一方通行の関係になっているように観察されることが多かつた。つまり受け取ったシンボルを大人の手助けを借りて解釈したり、相手への行為の返しを大人の手助けを必要としているように思われた。相手の言葉や行動を読みとり、自我に取り入れることが難しく、そこに大人の手助けを必要とすると考えられる。大人の手助けは、きょうだい関係を成立するような相互に了解し合える解釈的内容であり、介入しすぎないようにアドバイスする必要がある。

VII. 結 論

本研究は13組という限られた対象ではあったが、障害児がいるきょうだいの相互作用を健常児きょうだい群と比較して探索し、以下のことが明らかになった。

・健常児群に支配的な関係が多かったことは、指示が理解できたり、了解しあえる関係が基礎となり共通の目的とする共同作業に結びついた。

・健常群、障害児群ともにきょうだいの関わりの多くは、好意的な行動であった。

・障害児きょうだいの関係には、大人との関わりが必要であることや障害児群に共同作業が有意に少なかったことは、きょうだい間のやりとりが成立しにくいことを示唆していた。

・障害児群では障害児の好意的行動にきょうだいが否定的に反応することが多いために、健常きょうだいが楽しく関わりをもてるために、大人がある程度、解釈的な手助けをする必要があることが示唆された。

謝 辞

快く調査にご協力いただきましたご家族の方々に深く感謝申し上げます。また、調査の場の提供をいただき、ご協力いただきました滋賀県立小児保健医療センターの職員のみなさまにお礼申し上げます。

〔受付 '01.12.25〕  
〔採用 '02.12.14〕

文 献

1) Vadasy P.F., Donald R.F., Meyer J., et al: Siblings of Handicapped Children: A Developmental Perspective on Family Interactions, *Family Relations*, 33: 155—167, 1984  
2) Brody G.H., Stoneman Z. & Davis C.H.: Observations of the Role Relations and Behavior between Older Children with Mental Retardation and Their Younger Siblings, *American Journal on Mental Retardation*, 95 (5): 527—536, 1991

3) Gath A.: Sibling reactions to mental handicap: A comparison of the brothers and sisters of mongoloid children, *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 15: 187—198, 1974  
4) 羽場敏文: 心身症を発症した慢性疾患児の同胞4例の検討, *小児保健研究*, 52 (6): 609—611, 1993  
5) 坪井真喜子, 佐藤俊子他: 障害児をきょうだいに持つ中高生の心理的問題の考察, *児童青年精神医学とその近接領域*, 29: 8—9, 1998  
6) 前掲書3)  
7) Fisman S. & Wolf L.: The Handicapped Child: Psychological Effect of Parenting, Marital, and Sibling Relationships, *Psychiatric Clinics of North America*, 14 (1): 199—217, 1991  
8) モニカ・ザイフェルト著三原博光訳: ドイツの障害児家族と福祉—精神遅滞児と兄弟姉妹の人間関係—, 相川書房, 東京, 1994  
9) 稲葉三千男, 滝沢正雄, 中野 収訳: ミード精神・自我・社会, 青木書店, 東京, 1973  
10) 船津 衛: シンボリック相互作用論, 恒星厚生閣, 東京, 1976  
11) 船津 衛: ミードの自我論の研究, 恒星厚生閣, 東京, 1989  
12) Stoneman Z., Brody G.H. & Mackinnon C.: Naturalistic Observations of Children's Activities and Role while Playing with their Siblings and Friends, *Child Development*, 55: 617—627, 1984  
13) 前掲書10)  
14) 京林由季子, 井田範美: 精神発達遅滞児とそのきょうだいの相互作用に関する事例的検討, *心身障害学研究*, 16: 91—99, 1992  
15) 京林由季子, 井田範美: 障害児とそのきょうだいの関わりに関する研究—精神発達遅滞児とそのきょうだいの相互作用—, *児童育成研究*, 8, 3—18, 児童育成学会, 1990  
16) 前掲書14)  
17) 前掲書10)  
18) 泊 祐子, 古株ひろみ, 竹村淳子: 障害児とそのきょうだいの相互作用について(1), 第5回日本家族看護学会学術集会講演集, 27, 1998.  
19) Grossman F.K.: Brothers and sisters of retarded children: an exploratory study, Syracuse University Press, New York, 1972  
20) 松原治郎: [家] 第II章, 現代家族, 58—59, 東京大学出版社, 東京, 1978  
24) Riper M.V.: Family Variable Associated With Well-Being in Siblings of Children With Down's Syndrome, *J. Family Nursing*, 6 (3): 267—286, 2000  
25) 新美明夫, 他: 就学前の心身障害幼児をもつ母親のストレス—健常幼児の母親との比較, *発達障害研究*, 3 (3): 206—216, 1981  
26) 新美明夫, 植村勝彦: 学齢期心身障害幼児をもつ父母のストレス—ストレスの背景要因, *特殊教育研究*, 23(3): 23—34, 1985  
27) 大橋 薫: 現代家族の構造と機能, *社会福祉研究*, 第49号: 20—26, 1990

- 28) 杉原和子, 他: 重症心身障害児を持つ両親の障害受容と養育姿勢, 小児保健研究, 518 (4): 517—51, 1992
- 29) 植村勝彦, 新美明夫: 心身障害児の家族研究の流れ, 新児童心理学講座 12 巻, 161—162, 金子書房, 東京, 1991
- 30) 上野雅和: 5 節産業社会の発達と家族観, 講座家族 8, 家族観の系譜, 公文堂, 東京, 1974
- 31) Cleveland, D.W. & Miller N.: Attitudes and Life Commitment of Older Siblings of Mentally Retarded Adults: An Exploratory Study. In: Mental Retardation 15: 38—41, 1977
- 32) Dallas E., Stevenson J. & McGurk H.: Cerebral-palsied Children's Interactions with Siblings-II. Interactional Structure, J Child Psychiat, 34 (5): 649—671, 1993

### Role Taking and Interaction of the Children with disabilities and their Siblings on Everyday Play Activities

Yuko Tomari<sup>1)</sup>, Hiromi Kokabu<sup>2)</sup>, Kiyomi Tanaka<sup>3)</sup>, Junko Takemura<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup>Shiga University of Medical Science

Shiga Prefectural University, College of Nursing

<sup>3)</sup>Hiroshima Prefectural College of Health and Welfare

<sup>4)</sup>Shiga Saiseikai Hospital, School of Nursing

**Key words:** Children with disabilities, Siblings, Interaction, Observation, Role Taking

The role theory, described in Mead's theory of symbolic interaction, was used as the framework for this study. The purpose of this study was to shed light upon the interactions between pairs of siblings consisting of a normal child and a child with disabilities and their roles in such interactions.

Twenty-six pairs of siblings were chosen as subjects. Each of the 13 pairs of siblings in the study group consisted of a normal child and a child with disabilities, (age range: 3 years 10 months to 8 years 8 months). The control group included 13 pairs of healthy siblings who were sex- and age-matched to the study group. Interactions between siblings as they engaged in everyday play activities were videotaped. The tapes were later used for analysis to compare the study group with the control group.

A total of 12 behavioral patterns were observed for the initiation and response behaviors of each pair. In group work, interaction with adults, and independent actions, 15 behavioral patterns were observed.

The results showed that the study group had significantly more interactions with adults compared to the control group. The control group engaged in significantly more group work compared to the study group. Many healthy siblings in the study group responded negatively to their disabled siblings' affectionate behavior, while siblings in the control group did not respond as negatively to the affectionate behavior of the other sibling.

In the study group, significantly fewer siblings responded positively to the dominating behavior of their disabled siblings than did siblings in the control group to their sibling's dominating behavior.

Healthy siblings in the study group often lacked the ability to understand their disabled siblings' signs, or they simply paid no attention because they were absorbed in their own activities. It is assumed that when one of two siblings is disabled, a certain degree of adult involvement is required for the two to play together and have fun.